

寺田寅彦

箆虫と蜘蛛





# 蓑虫と蜘蛛



二階の縁側のガラス戸のすぐ前に大きな楓かえでが空いっぱいみのむしに枝を広げている。その枝にたくさんみのむしな糞虫がぶら下がっている。

去年の夏じゅうはこの虫が盛んに活動していた。いつも午ひるごろになるとはい出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食っていた。からだのわりおうせいに旺盛な彼らの食欲は、多数の小枝を坊主にしてしまうまでは満足されなかった。紅葉が美しくなるころには、もう活動はしなかったようである。とにかく私は日々おひに変わって行く葉の色

彩に注意を奪われて、しばらく糞虫の存在などは忘れていた。

しかし紅葉が干からび縮れてやがて散ってしまふと、裸になったこずえにぶら下がっている多数の糞虫が急に目立って来た。大きいのも小さいのも、長い小枝を杖のつえようにさげたのや、枯れ葉を一枚肩にはおったのや、いろいろさまざまの格好をしたのが、明るい空に対して黒く浮き出して見えた。それがその日その日の風に吹かれてゆらいでいた。

かよわい糸でつるされているように見えるが、いかな

る木枯らしにも決して吹き落とされないほど、しっかり取りついているのであった。縁側から<sup>ほうき</sup>箒の先などではね落とそうとしたが、そんな事ではなかなか落ちそうもなかった。

自分は冬じゆうこの死んでいるか生きているかもわからない虫の外殻<sup>がいかく</sup>の鈴成りになっているのをながめて暮らして来た。そして自分自身の生活がなんだかこの虫のによく似ているような気のする時もあった。

春がやって来た。今まで灰色や土色をしていたあらゆる落葉樹のこずえにはいつとなしにぽうつと赤みがさし

て来た。鼻のさきの例の楓かえでの小枝の先端も一つ一つふくらみを帯びて来て、それがちょうどガーネットのような光沢をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時の事を考えているうちに、それまでにこのみのむし叢虫を駆除しておく必要を感じて来た。

たぶんだめだろうとは思ったが、試みに物干し竿ざおの長いものを持って来て、たたき落とす、はね落とすとした。しかしやっぱり無効であった。はねるたびにあの紡錘形の袋はプロペラーのように空中に輪をかいて回転するだけであった。悪くすると小枝を折り若芽を傷つけるばかり



りである。今度は小さな鋏はさみを出して来て竿の先に縛りつけた。それは数年前に流行した十幾とおりの使い方のあるという西洋鋏である。自分は今その十幾種のほかのもう一つの使い方をしようというのであった。鋏の発明者も、よもやこれが簍虫を取るために使われようとは思わなかったらう。鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛りつけた。円滑な竹の肌はだと、ニツケルめっきの鋏の柄とを縛り合わせるのはあまり容易ではなかった。

ぶらぶらする竿の先を、ねらいを定めて虫のほうへ持って行った。そして開いた鋏の刃の間に虫の袋の口に近

い所を食い込ませておいてそつと下から突き上げると案外にうまくちぎれるのであった。それでもかなり強い抵抗のために細長い竿は弓状に曲がる事もあった。幸いに枝を傷つけないで袋だけをむしり取る事ができたのである。

あるものは枝を離れると同時に鋏を離れて落ちて来た。しかしまたあるものは鋏の間に固く食い込んでしまった。始めからおもしろがって見ていた子供らは、落ちて来るのを拾い、鋏はさみにはさまったのをはずしたりした。二人の子が順番でかわるがわる取るのであったが、年上

のほうは虫に手をつけるのをいやがって小さなシヨベルですくってはジャムの空罐あきかんへほうり込んでいた。小さい妹のほうはかえって平気で指でつまんで筆入れの箱の上に並べていた。

庭の楓かえでのはあらかた取り尽くして、他の木のもあさって歩いた。結局数えてみたら、大小取り交せて四十九個あった。ジャムの空罐一つと筆入れはちようどいっばいになった。それを一ぺん庭の芝生しばふの上にぶちまけて並べてみた。

一つ一つの虫の外殻がいかくにはやはりそれぞれ個性があつ

た。わりに大きく長い枯れ枝の片を並べたのが大多数であるが、中にはほとんど目立つほどの枝切れはつけないで、渋紙のような肌はだをしているのもあった。えにいだの豆のさやをうまくつなぎ合わせているのもあって、これがそのそはって歩いてきた時の滑稽こっけいな様子がおのずから想像された。

なかんずく大きなのを選んで袋を切り開き、虫がどうなっているかを見たいと思った。竿さおの先の鋏はさみをはずして袋の両端から少しずつ虫を傷つけないように注意しながら切って行った。袋の繊維はなかなか強靱きょうじんであるの

で鈍い鋏の刃はしばしば切り損じて上すべりをした。や  
っと取り出した虫はかなり大きなものであつた、紫黒色  
の肌がはち切れそうに肥ふとつていて、大きな貪欲どんよくそうな口  
ばしは褐色かつしよくに光つていた。袋の暗やみから急に強烈な  
春の日光に照らされて虫のからだにどんな変化が起こつ  
ているか、それは人間には想像もつかないが、なんだか  
酔つてでもいるように、あるいはまだ長い眠りがさめき  
らないようにものうげに八対の足を動かしていた。芝生  
の上に置いてもとの古巢あの空きがらを頭の所におっつけ  
てやっても、もはやそれを忘れてしまったのか、はい込

むだけの力がないのか、もうそれきりからだを動かさないでじっとしていた。

もう一つのを開いて見ると、それはからだの下半が干すばって舍利しゃりになっていた。蚕にあるような病菌がやはりこの虫の世界にも入り込んで自然の制裁を行なっているのかと想像された。しかしみのむし叢虫の恐ろしい敵はまだほかにあった。

たくさんの袋を外からつまんで見ているうちに、中空で虫のお留守になってるのがかなり多くのパーセントを占めているのに気がついた。よく見ていると、そのよ

うなのに限って袋の横腹に直径一ミリかそこらの小さい孔あながある事を発見した。変だと思つてはさみ鋏でその一つを切り破つて行くうちに、袋の中から思いがけなく小さい蜘蛛くもが一匹飛び出して来てあわただしくどこかへ逃げ去つた。ちらりと見ただけであるがそれは薄い紫色をしたかわいらしい小蜘蛛であつた。

この意外な空巢あきすの占有者を見た時に、私の頭に一つの恐ろしい考えが電光のようにひらめいた。それで急いで袋を縦に切り開いて見ると、はたして袋の底に滓かすのようになつた糞虫の遺骸いがいの片々が残っていた。あの肥大な虫

の汁しるけ気という汁気はことごとく吸い尽くされなめ尽くされて、ただ一つまみの灰はい殻がらのようなものしか残っていないなかつた。ただあの堅い褐色かつしよくの口ばしだけはそのままの形をとどめていた。それはなんだか兜かぶとの鉢はちのような格好にも見られた。灰色の壙こうけつ穴の底に朽ち残った戦衣のくずといったような気もした。

この恐ろしい敵は、叢虫の難攻不落と頼む外郭の壁 upper を忍び足ではい歩くに相違ない。そしてわずかな弱点を捜しあてて、そこに鋭い毒どく牙がを働かせ始める。壁がやがて破れたと思うと、もう叢虫のわき腹に一滴の毒液が注



射されるのであろう。

人間ならば来年の夏の青葉の夢でも見ながら、安楽な眠りに包まれている最中に、突然わき腹を食い破る<sup>おおかみ</sup>狼の牙<sup>きば</sup>を感じるようなものである。これを払いのけるためには<sup>みのむし</sup>糞虫の足は全く無能である。唯一の武器とする<sup>くちさき</sup>吻を使おうとするとあまりに窮屈な自分の家はからだを曲げる事を許さない。最後の苦悩にもがくだけの余裕さえもない。生物の間に行なわれる殺戮<sup>さつりく</sup>の中でも、これはおそらく最も残酷なものの一つに相違ない。全く無抵抗な状態において、そして苦痛を表現する事すら許されない

で一分だめしに殺されるのである。

虫の肥大なからだはその十分の一にも足りない小さな蜘蛛くもの腹の中に消えてしまっている。残ったものはわずかな外皮のくずと、そして依然として小さい蜘蛛一匹の「生命」である。差し引きした残りの「物質」はどうなつたかわからない。

糞虫が繁殖しようとする所にはおのずからこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節が行なわれているのであつた。私が糞虫を駆除しなければ、今に楓かえでの葉は食い尽くされるだろうと思つたのは、あまりにあさはかな人間

の自負心であつた。むしろただそのままにもう少し放置して自然の機巧を傍観したほうがよかつたように思われ  
て来たのである。蓑虫にはどうする事もできないこの蜘蛛にも、また相当の敵があるに相違ない。「昆虫こんちゆうの生活」という書物を読んだ時に、地蜂じばちのあるものが蜘蛛を攻撃して、その毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺し通してこれを麻痺まひさせるという記事があつた。麻痺した蜘蛛のわき腹に蜂は一つの卵を生みつけて行く。卵から出た幼虫は親の据え膳すぜんをしておいでくれた佳肴かこうをむさぼり食うて生長する、充分飽食して眠っている間に幼虫の単

純なからだに複雑な変化が起こって、今度目をさますともう一人前の蜂になっているといふのである。

ある蜘蛛が、ある蛾がの幼虫であるところの蓑虫の胸に食いついている一方では、蓑虫のような形をしたある蜂はちの幼虫が、他の蜘蛛くもの腹をしゃぶっている。このような闘争殺戮さつりくの世界が、美しい花園や庭の木立ちの間に行なわれているのである。人間が国際連盟の夢を見ている間に。

ある学者の説によると、動物界が進化の途中で二派に分かれ、一方は外皮にかたいキチン質を備えた昆虫こんちゆうに

なり、その最も進歩したものが蜂や蟻ありである。また他の分派は中心にかたい背骨ができて、そのいちばん発展したのが人間だという事である。私にはこの説がどれだけのほんとうだかわからない。しかしいずれにしても昆虫の世界に行なわれると同じような闘争の魂があらゆる有脊ゆうせき椎動物ついでどうぶつを伝わって来て、最後の人間に至ってどんなぐあいに進歩して来たかをつくづく考えてみると、つまりわれわれの先祖がみのむし蠶虫や蜘蛛の先祖と同じであつてもいいような気がして来る。

四十九個の紡錘体の始末に困つたが、結局花畑のすみ

の土を深く掘ってその奥に埋めてしまった。その中の幾パーセントには、きつと蜘蛛がはいっていたに相違ない。こうして私の庭での簞虫と蜘蛛の歴史は一段落に達したわけである。

しかしこれだけではこの歴史はすみそうに思われな  
い。私は少なからざる興味と期待をもってことしの夏を  
待ち受けている。

(大正十年五月、電氣と文芸)







日本文学電子図書館

---

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店  
昭和45年8月20日 第38刷発行

---



日本文学電子図書館